

生き方リサーチ

豊かだけど不安な中で――

■4月はスタートの月

4月は進学、進級、就職、転職、そこで新生活が開花する。生き方の節目の月だ。厄介な花粉の影響もあるが、春の訪れは、一年の中で最もムズムズ、ワクワク、ドキドキしてくる。

前号では、私たちHRIの調査結果から「日本人の生き方4タイプ」を紹介させていただいた。そこで、生き方の節目のシーズンに合わせて本号では「生き方選びの自由と不安」について述べてみたい。

■夢と希望？不安とリスク？

一昔前までならば、新生活のスタートは、「夢+希望」V「不安+リスク」というポジティブな不等式で表せた。しかし今、この不等式の逆転現象が広がり始めている。新しい一歩を踏み出す直前には、どちらに向けて踏み出すかの決心が必要だ。言い方を換えれば、一つを選ぶために、他の多数の可能性を捨てるということになる。

しかし、80年代くらいまでは、いくら自分の生き方を自ら選ぶと言っても、じつは世間が決めた生き方に従っていたのが実状だろう。進学、就職など、社会の慣習や序列構造の中で、その時点の当人に最もふさわしい決定が、世間から下されていたのだ。成長社会では、そのような生き方

をすんなりと受け入れることが、当人やその家族の幸せのために、最も効率良い選択だった。時代の勢いが、生き方の選択の迷いを吹き飛ばすほど強く、信頼できたからだ。みんなと同じモノサシに基づいて生き方を決めておけば、「夢+希望」V「不安+リスク」だった。

しかし90年代以降、従来の価値観があてにならなくなり、与えられた単線型のレールの上を生きることの安心よりも不自由さが気になり始めた。そして、「生き方の選択肢が多い社会こそ、豊かな社会だ」という気運が広がった。

自分の生き方は、自分で選んで、自分で決めて、自分で責任を負うという時代の幕開けだ。しかし、時代の勢いが失速した中では、「自分探し」の失敗は許されなれないという強迫感も同時に強まった。「夢+希望」V「不安+リスク」への逆転である。

■迷いの中のコア世代たち

このような価値観の過渡期を、どんなライフステージで経験したかで、現在の生き方に差が現れ始めている。

青年期に波をかぶったのが、70～80年代初め生まれの、いわゆる「ロスト・ジェネレーション」だ。彼らには、「自分らしさ」を活かせる、「かけがえない」適職を選ばなくてはならないという強迫感が強い。それゆえに、青い鳥を探し続ける「フリーター」や、青い鳥探しを早々にあきらめてしまった「ニート」が、この年代から多数生まれた。新

人類」世代は、バブル経済の勢いによって社会に出たものの、働き盛りの時期にバブル崩壊を迎えてしまう。さらに、一個の自立「や」男女雇用均等」という建前の価値観と、旧態依然たる会社社会の価値観の間で苦しんだ者も多い。転職者の急増、晩婚化の急進など「自己実現」の強迫に駆られ始めるのも、このあたりからだ。

一方、家庭での子育てでは「個性」を育てることに価値が置かれ、そのための早期教育やマニユアル子育て、将来の選択自由度を確保するための一流大学進学を目指した小・中学校からの受験ブームが、公立学校教育の質の低下とあいまって過熱化する。いつの間にか、子育ての「個性志向」が「ブランド志向」に変質してしまったのは、リスク覚悟の生き方より、安心ブランドの個性ラベル獲得をと

いう親心なのだろうか。この

ような世情を反映してか、相次ぐ子育て雑誌の創刊が賑やかだ。誌面を見ると、従来のような乳幼児の子育てマニユアルではなく、小中学生の子育てマニユアル記事が多いのに驚かされる。さらに、それが日経やアエラ、プレジデントなどビジネス情報誌から出てきているのも興味深い。

■ふわっとスマートな高校生

より若い世代ではどうだろう。先月、日本青少年研究所が発表した調査報告「高校生の友人関係と生活意識」の結果は興味深いものだった。この調査は、日本、アメリカ、中国、韓国の国際比較をして

いる。その中から、高校生の関心事に関する分析結果を紹介したい。19項目について関心の強さを質問した結果から因子分析を行い、五つの因子を抽出したものだ。

第一因子は「流行」「携帯

電話や携帯メール」「容姿」などで、私は「ふわっとスマート型」と名付けた。第二因子は「コンピュータやインターネット」「ゲーム」などで「サイバー・オタク型」、第三因子は「勉強や成績」「将来の進路」など「コッソツ・マイビジョン型」、第四因子は「地域社会」「国家」など「コミュニティ貢献型」、第五因子は「レジャー」「クラブ活動」など「自分流エンジン型」だ。これらの因子得点平均値を国別に比較したグラフが図1である。

この結果から、日本の高校生の特徴は、「ふわっとスマート」志向が強く、「コッソツ・マイビジョン」志向が弱いのが明らかだ。さらに、「自分流エンジン」で満足できるといふ傾向も目立つ。この他の結果からも、日本の高校生の生活意識には、不安も希薄だが、将来への期待や希望が見えたらぬ。

■やってみないとわからない

このような調査結果を眺めながら、2月に訪ねたデンマークの中学校のクラスでのやりとりを思い出した。彼らの日本社会に対するイメージは、とてもポジティブでエキサイティングなものだった。しかし、彼らは母国で希望を見つけられずにいるわけではない。「卒業したら、本格的に女優を目指して専門学校で学ぶ」「子どもが好きなので、保育士になるための勉強をする。好きな仕事である上に、結婚しても、子育て後も続けられるし」など、それぞれに少しも無理を感じさせない未来への希望の道筋を語っていた。「思い通りにいかないかもしれないけれど、やってみなくちゃわからない。ダメでもゼロに戻るわけじゃないし」と、明らかに「夢+希望」V「不安+リスク」の心持ちを語っていた。

■レッツ・スタート！

フランスで、26歳未満を雇えば2年間は理由無く解雇できるという新たな雇用制度(CPE)に対して、若者たちの怒りが爆発し、社会を巻き込み全国規模のデモとなっている。デモは、民主主義社会の正当で前向きな怒りの表現だ。デモの先頭は高校生たちだという。

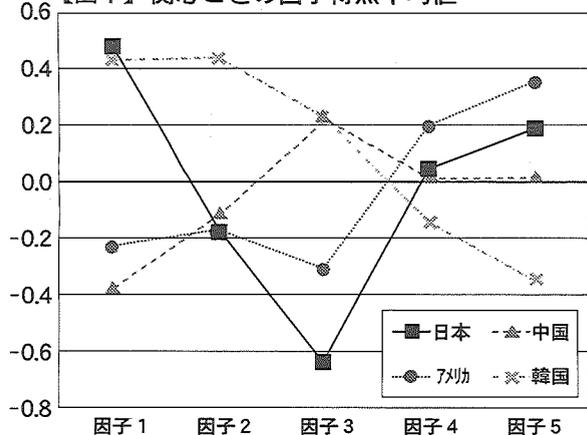
豊かな選択肢、自己決定と自己責任、これが成熟社会の豊かさならば、万人に通じる唯一の生き方の正解など無さそうだが、ならば、後ろ向きではなく、前向きにスタートを切る元気な社会を築きたい。そのために、老いも若きもそれぞれのニュー・スタートを始めよう。(オムロン・ヒューマンルネッサンス研究所 中間真一)

前向きに選んで、「自己決定」



子育てマニユアルの記事が雑誌にはあふれる

【図1】関心ごとの因子得点平均値



(日本青少年研究所「高校生の友人関係と生活意識」)